

さ　　ど　　わら　　ちょう　　ない　　い　　せき
佐　　原　町　内　遺　跡　VI

—開発事業に伴う事前試掘・確認調査報告書—

2003. 3

宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会

序

佐土原町は、県都・宮崎市に隣接し、宮崎空港・東九州縦貫高速道路へのアクセスが良好という好条件に恵まれ近年、急速に開発が進められてきました。宅地造成・道路建設・工業団地造成・農業基盤整備等、あらゆる方面的開発が佐土原町内全域にわたって毎年行われています。

そこで佐土原町教育委員会では、佐土原町内の文化財を後世に継承する手立てとして平成元年から2年度にかけて「佐土原町遺跡詳細分布調査報告書」を作成しました。以後、諸開発と文化財保護とが共存できるように事業実施の事前に試掘・確認調査を行い、遺跡の保護に努めてまいりました。

平成9年度から13年度にかけて「町内遺跡Ⅰ～V」を発刊してまいりましたが、ここに、平成13・14年度に実施しました町内の試掘・確認調査の結果を「町内遺跡VI」として報告いたします。

この報告書が、後代の人々が佐土原町の文化財を保護していく上での資料となること、また、学術資料はもとより文化財への理解・認識を深める一助となり、広く教育・研究の場等でご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたり関係各位よりいただきましたご指導・ご協力に対しまして心よりお礼申し上げます。

平成15年3月

佐土原町教育委員会
教育長 菊池 俊彦

例　言

1. 本書は、各種開発事業に伴い佐土原町教育委員会が文化庁・宮崎県教育委員会の補助を受け実施した町内遺跡の試掘・確認調査の報告書である。
2. 試掘・確認調査は、各種開発事業上の依頼を受け佐土原町教育委員会が主体となり、平成13・14年度に社会教育課文化財係が行った。
3. 試掘・確認調査は、平成14年10月16日から平成15年2月3日までの期間行った。
4. 本書に使用した写真は、木村が撮影し、空中写真は、株式会社九州航空に委託した。
5. 開発地域の地質については、宍戸地質研究所　宍戸章氏に調査を依頼した。その結果は付録（1）（2）として本書に記載している。
6. 本書で使用した位置図などは、国土地理院発行の2万5千分の1図を基に作成した。
7. 出上遺物は、佐土原町教育委員会（佐土原町出土文化財センター）で保管している。
8. 色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版　標準上色帖」による。
9. 方位は磁北、レベルは海拔高である。
10. 本書の執筆・編集は、社会教育課文化財係主幹　木村明史が担当した。

本文目次

第1章 はじめに

| | |
|-------------------|---|
| 第1節 調査に至る経緯 | 2 |
| 第2節 調査の組織 | 2 |

第2章 佐土原町の環境と調査地の概要

| | |
|------------------------|---|
| 第1節 佐土原町の環境 | 2 |
| 1. 自然環境 | 2 |
| 2. 歴史環境 | 3 |
| 第2節 調査の目的 | 3 |
| 第3節 各遺跡の位置と環境の概要 | 3 |
| 1. 長菌原遺跡 | 3 |
| 2. 天神川地区遺跡 | 3 |
| 3. 境畠遺跡 | 3 |

第3章 試掘・確認調査

| | |
|-------------------|----|
| 第1節 長菌原遺跡 | 4 |
| 第2節 天神川地区遺跡 | 10 |
| 第3節 境畠遺跡 | 22 |

第4章 おわりに

付 編

| | |
|---|----|
| 佐土原町天神地区県営圃場整備事業区域周辺の地形・地質と遺跡の関係について（1） | 29 |
| 佐土原町下ノ山遺跡及び小牧遺跡と周辺の地質・地形について（2） | 32 |

挿図目次

| | | |
|-----|-----------------------|----|
| 第1図 | 平成13・14年度町内遺跡試掘・確認調査地 | 1 |
| 第2図 | 長菌原遺跡調査区図 | 4 |
| 第3図 | 天神川地区遺跡調査区図 | 10 |
| 第4図 | 境畑遺跡調査区図 | 22 |

図版目次

| | | |
|------|------------------|----|
| 図版1 | 長菌原遺跡調査地 | 5 |
| 図版2 | 長菌原遺跡調査地平面図 | 6 |
| 図版3 | 長菌原遺跡土層断面図（1） | 7 |
| 図版4 | 長菌原遺跡土層断面図（2） | 8 |
| 図版5 | 長菌原遺跡遺構写真 | 9 |
| 図版6 | 天神川地区遺跡調査地 | 11 |
| 図版7 | 天神川地区遺跡調査地平面図（1） | 12 |
| 図版8 | 天神川地区遺跡調査地平面図（2） | 13 |
| 図版9 | 天神川地区遺跡調査地平面図（3） | 15 |
| 図版10 | 天神川地区遺跡基本土層図 | 17 |
| 図版11 | 天神川地区遺跡遺構写真（1） | 18 |
| 図版12 | 天神川地区遺跡遺構写真（2） | 19 |
| 図版13 | 天神川地区遺跡遺物写真 | 20 |
| 図版14 | 天神川地区遺跡実測図 | 21 |
| 図版15 | 境畑遺跡調査地 | 23 |
| 図版16 | 境畑遺跡調査地平面図 | 24 |
| 図版17 | 境畑遺跡土層断面図（1） | 25 |
| 図版18 | 境畑遺跡土層断面図（2） | 26 |
| 図版19 | 境畑遺跡遺構写真 | 27 |



第1図 平成13・14年度町内遺跡試掘・確認調査地

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今回の報告書（佐土原町内Ⅵ）は、平成13年度実施の長瀬原遺跡と平成14年度実施の天神川地区遺跡、境畠遺跡の試掘・確認調査の報告である。それぞれの調査について、事前の事業説明が行われ、開発予定地の試掘・確認調査を行い、調査結果を関係者に報告した。以下その内容である。

第2節 調査の組織

平成13年度

| | | | |
|------------|-----------|--------|-------|
| 調査主体 | 佐土原町教育委員会 | 教 育 長 | 菊池 俊彦 |
| | | 社会教育課長 | 松崎 直彦 |
| | | 同課長補佐 | 年見 秀雄 |
| 庶務担当 | | 文化財係長 | 東 浩一郎 |
| 〃 | | 主任 | 黒木 直英 |
| 〃 | | 主査 | 櫛間 史朗 |
| 調査担当 | | 主査 | 木村 明史 |
| 佐土原城跡歴史資料館 | 館 | 長 | 赤木 達也 |
| 出土遺物整理員 | | | |

(7月まで)

(9月から)

平成14年度

| | | | |
|---------|------------|--------|--------------|
| 調査主体 | 佐土原町教育委員会 | 教 育 長 | 菊池 俊彦 |
| | | 社会教育課長 | 松崎 直彦 |
| | | 同課長補佐 | 年見 秀雄 |
| 庶務担当 | | 文化財係長 | 東 浩一郎 |
| 〃 | | 主任 | 清 正 |
| 〃 | | 主査 | 櫛間 史朗 (9月まで) |
| 調査担当 | | 主査 | 木村 明史 |
| 特別調査員 | 穴戸地質研究所 | 所長 | 穴戸 章 |
| | 佐土原城跡歴史資料館 | 館長 | 赤木 達也 |
| 出土遺物整理員 | | | |

(10月まで)

(1月から)

第2章 佐土原町の環境と調査地の概要

第1節 佐土原町の環境

1. 自然環境

佐土原町は、県都宮崎市の北側に隣接し、一年の年平均気温は17度で比較的温暖な気候で町の総面積は、56.84km²を有する。地形は、北西部に都於郡・仲間原台地、その南に船野台地、その南東に年居台地が東西方向に延びる。また、仲間原台地の北側には鹿野田・上田島丘陵で構成され東南の佐土原丘陵に連なる。一つ瀬川沿いは、一つ瀬川低地と広瀬海岸低地で形成される。海岸沿いから西側に向かって砂丘列が並ぶ。

2. 歴史環境

佐土原町は、船野台地を中心として旧石器時代から縄文時代にかけて先史時代の遺跡が多く点在する。弥生時代では、佐土原丘陵南端で石崎川の西側に広がる下那珂遺跡において前漢鏡の一種である、き竜文鏡と100基以上の方形住居が確認された。また、海岸沿いには伊賀船遺跡で船作跡が出土した。古墳時代では、同じく佐土原丘陵南端上の土器田東1号から線刻画が見つかっている。その他に佐土原町古墳、那珂村古墳、広瀬村古墳など約150基近くが県指定になっている。

奈良・平安期では、佐土原丘陵西側の下村窯跡群を平成3年から4年にかけて民間のゴルフ場建設に伴い調査を実施した。窯は10窯確認され、出土物は、須恵器・瓦で南九州最大の古代窯跡群である。この窯跡群から出土した遺物は、西都市国分寺跡の出土品と類似するので同窯の供給窯と考えられる。

中世になると伊東氏による佐土原支配が始まった。最初の拠点に古城を築き田島一帯を治め、近世期に入る頃、佐土原丘陵東端部に佐土原城を構え北側に一つ瀬川を面し日向支配の中心とした。その後、佐土原城主は天正から慶長にかけて島津家久（宗家第15代貴久の子）とその子豊久が佐土原を治めるが、関ヶ原の戦いで豊久が戦死したため佐土原は一時天領となる。慶長8年（1603）に島津以久（宗家第15代貴久の弟、忠将の子）が佐土原3万石の初代藩主として封じられてから、第10代忠寛までの約270年間、佐土原藩として再び島津家に治められることとなった。

中世から江戸期の間、佐土原には多くの寺院が建立されたが、魔仏毀釈により廃寺になったものもある。その中で、大光寺・高月院などは現在に至るまで残っている。

近代には、日向の中心は現在の県都宮崎市へと移っていくが、西南の役に出兵し戦死した島津啓次郎や、西郷札の製作所など歴史に残る出来事が多い。

現代に入ると、工場の操業開始や工業団地へのハイテク産業の誘致など、産業活動が活発に行われるようになってきた。

第2節 調査目的

県管や町、民間の各種整備事業に伴い開発事業と文化財保護の調和を図り、事業を円滑に推進するために遺跡の試掘・確認調査を行う。

第3節 各遺跡の位置と環境の概要

1. 長菌原遺跡

長菌原遺跡は、佐土原町の西部の船野台地上で東西に舌状に伸びる標高86mの台地に立地する。

2. 天神川地区遺跡

天神川地区遺跡は、佐土原町の北端を東西に流れる一つ瀬川沿いの低地及び佐土原丘陵の縁辺部に立地する。

3. 境畠遺跡

境畠遺跡は、船野台地の間を流れる河岸段丘状に位置する。

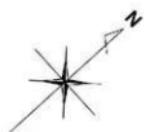
第3章 試掘・確認調査

第1節 長菌原遺跡

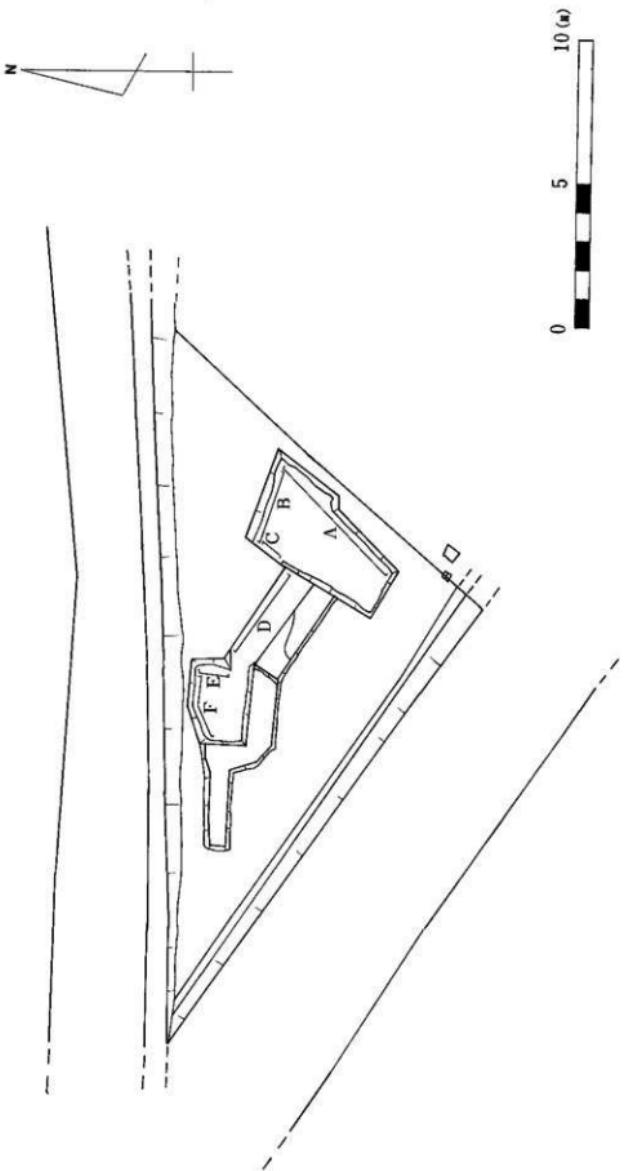
| | | | | | |
|-------|--|---------|---|-------|-------|
| 市町村名 | 佐土原町 | 調査主体 | 佐土原町教育委員会 | 調査担当者 | 木村 明史 |
| 遺跡名 | 長菌原遺跡 | 所在地 | 佐土原町大字西上那珂 | | |
| 調査原因 | 無線基地局設置 | 調査面積 | 64m ² (トレント面積: 29.19m ²) | | |
| 調査期間 | 平成13年11月6日～ 11月10日 | 調査後の処置 | 消滅 | | |
| 遺跡の種別 | 散布地 | 遺跡の主な時代 | 後期旧石器時代～縄文時代早期 | | |
| 検出遺構 | なし | | | | |
| 出土遺物 | なし | | | | |
| 特記事項 | 舌状台地の根幹部に立地するためか、生活に関する遺構・遺物は確認できなかった。 | | | | |



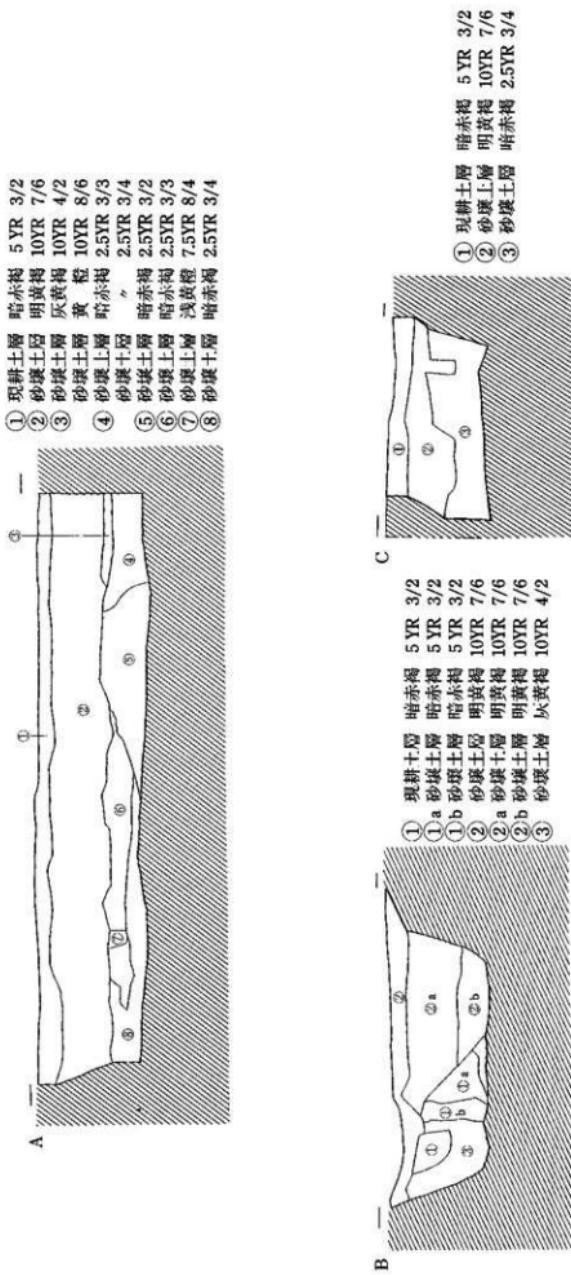
第2図 長菌原遺跡調査区図



長菌原遺跡調査地

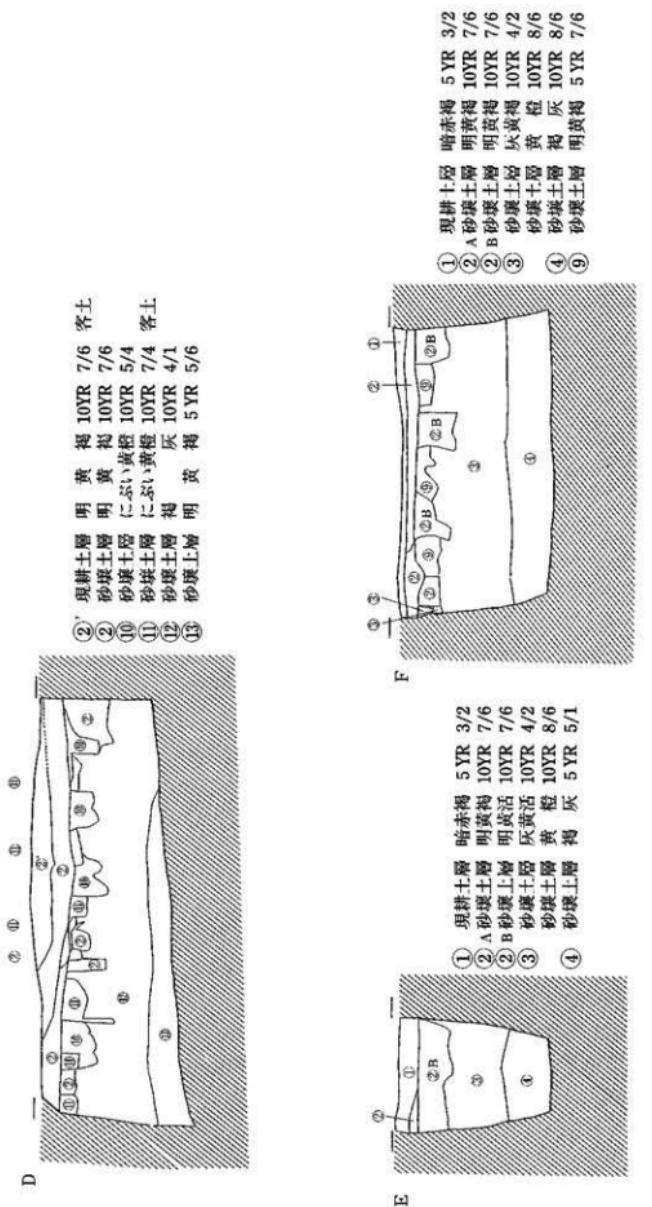


長岡市道跡調査地平面図



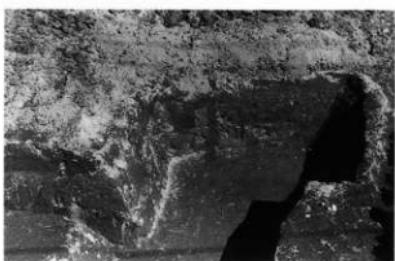
長園原遺跡土層斷面圖 (1)

長園原遺跡土層斷面圖 (2)





北方向から



北方向から



北方向から



北方向から

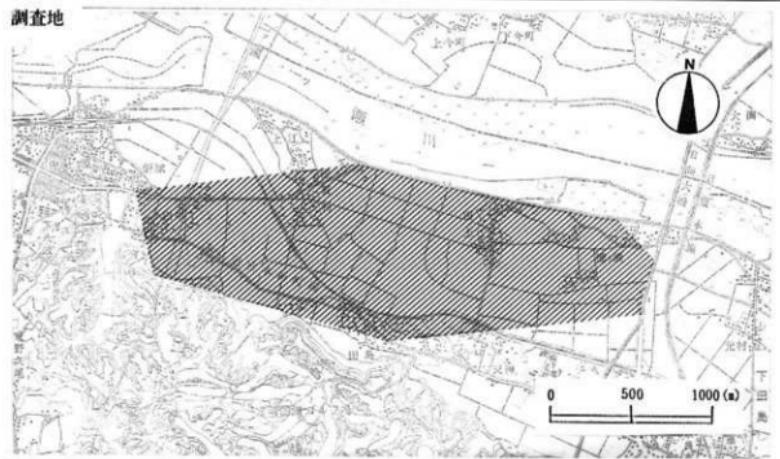


北方向から

長蔵原遺跡遺構写真

第2節 天神川地区遺跡

| | | | | | |
|-------|--|---------|------------------------------------|-------|-------|
| 市町村名 | 佐土原町 | 調査主体 | 佐土原町教育委員会 | 調査担当者 | 木村 明史 |
| 遺跡名 | 天神川地区遺跡 | 所在地 | 佐土原町大字西上那珂 | | |
| 調査原因 | 県営担い手育成基盤整備事業 | 調査面積 | 108ha (トレント面積: 168m ²) | | |
| 調査期間 | 平成14年10月16日～ 12月24日 | 調査後の処置 | 消滅 | | |
| 遺跡の種別 | 散布地 | 遺跡の主な時代 | 中世～近世 | | |
| 検出遺構 | 柱穴、溝 | | | | |
| 出土遺物 | 陶磁器片 (7点) 陶器片 (5点) 須恵器片 (10点) 土師器片 (100点) | | | | |
| 特記事項 | 佐土原丘陵の山麓部には、標高10m前後の狭長な平坦面が沖積段丘として形成されている。この沖積段丘面から主に遺構・遺物が確認された。その他の遺物は、旧河道（沖積低地の帶状凹地）から出土している。このことは、一帯の生活跡は、沖積段丘で日常の生活が営まれ、旧河道等の地形で確認される遺物は、日常生活の流れ込み遺物と推測される。 | | | | |



第3図 天神川地区遺跡調査区図

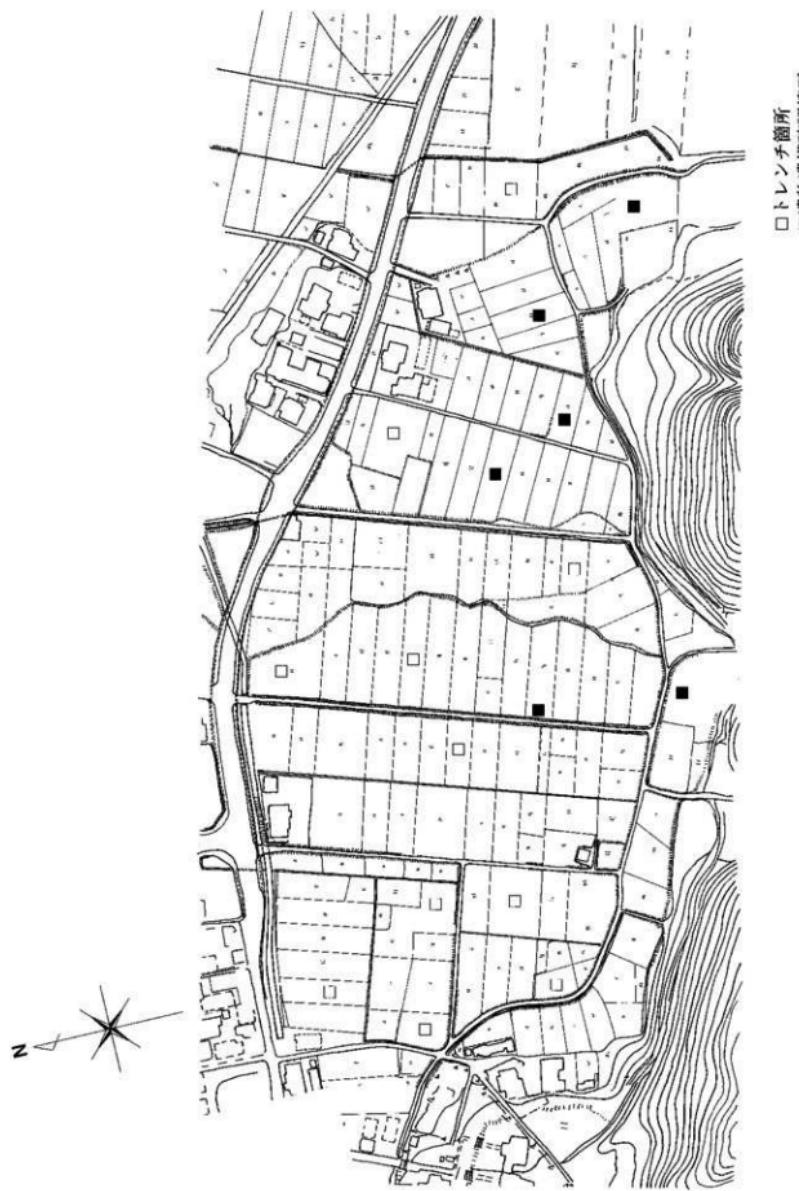


天神川地区遺跡調査地

0 50 100 (m)

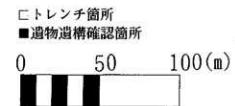
□レンチ箇所
■遺物遺構確認箇所

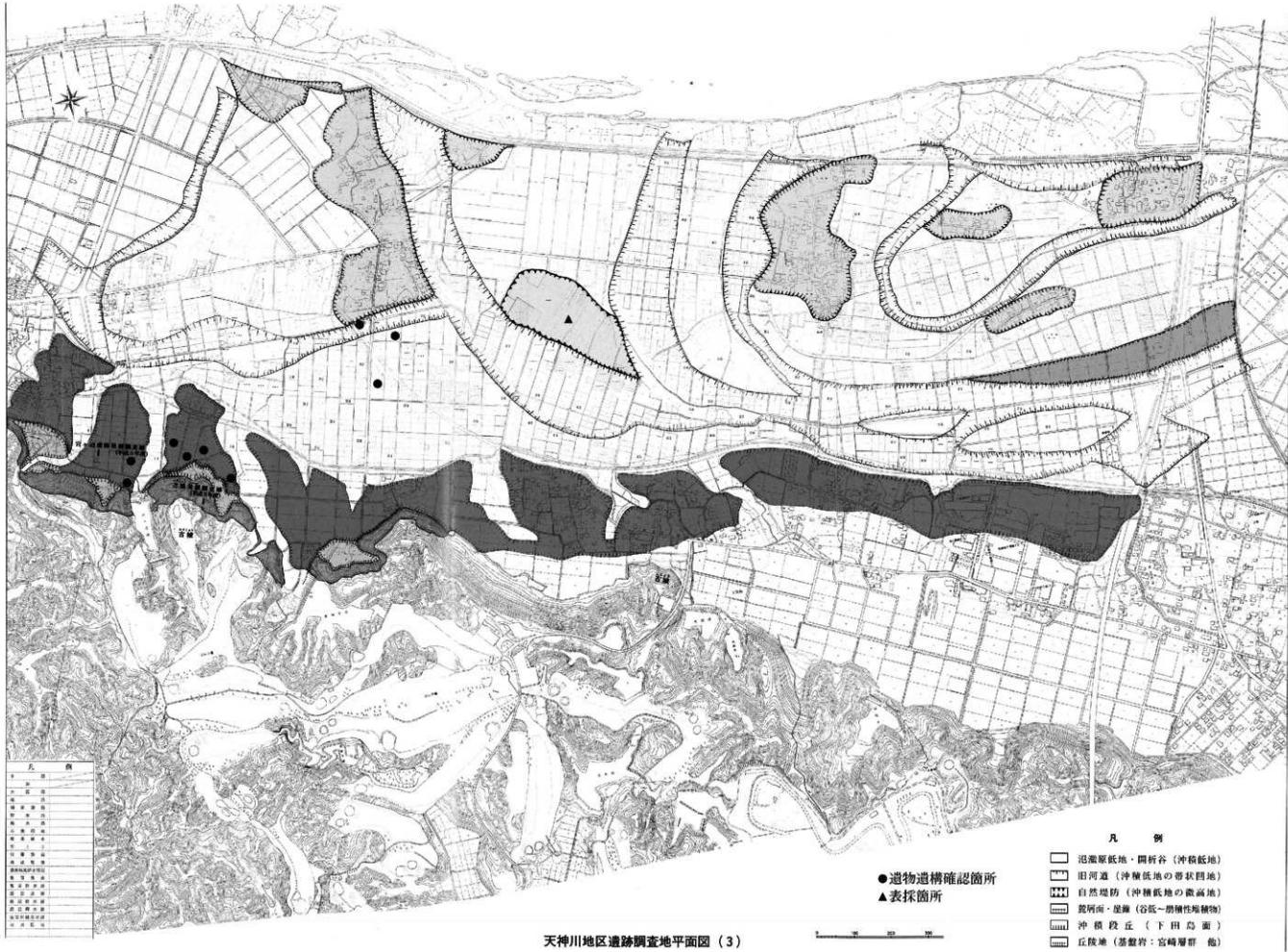
天神川地区遺跡調査地平面図（1）



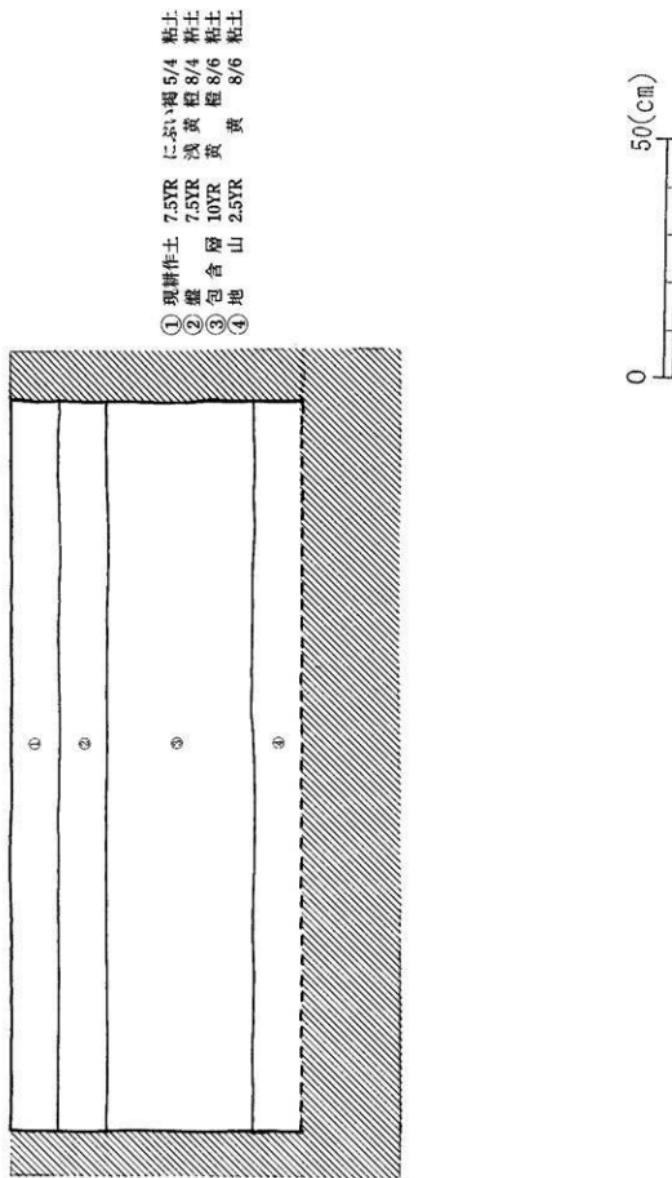


天神川地区遺跡調査地平面図（2）





天神川地区遺跡調査地平面図（3）



天神川地区道路基本土層図



I区⑨



I区⑩



I区⑪



I区⑫



I区⑬



I区⑭

天神川地区遺跡遺構写真（1）



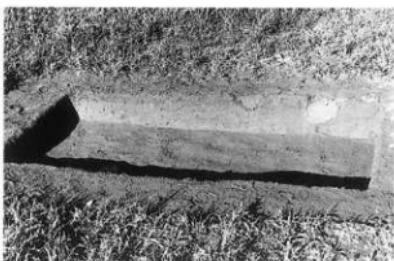
II区⑩



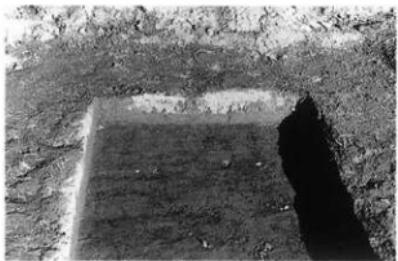
II区⑪



II区⑫



III区⑬

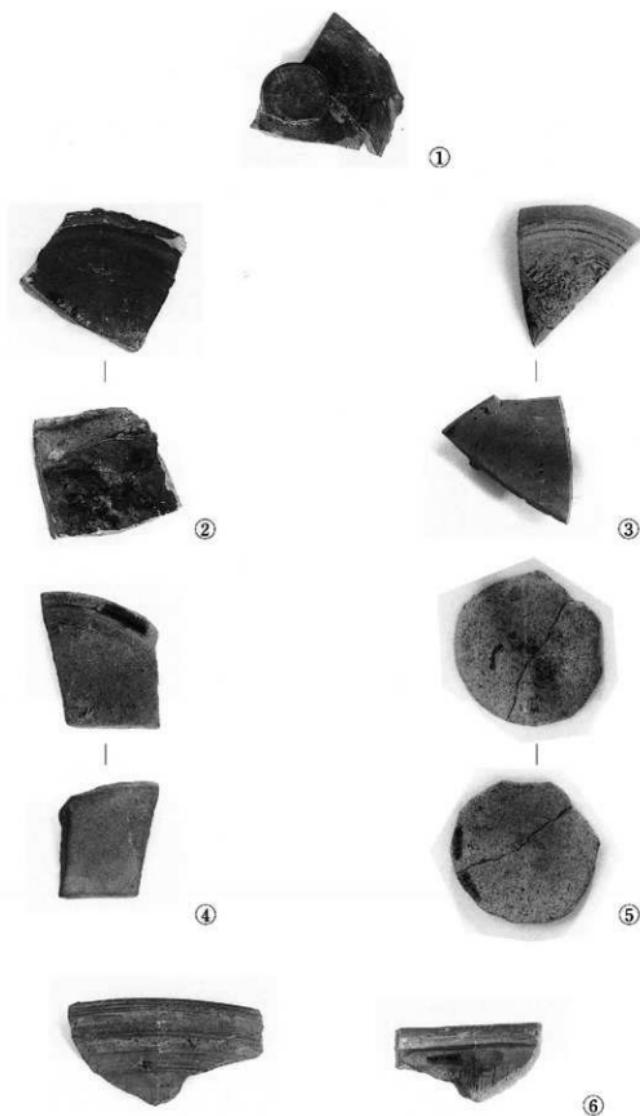


III区⑭

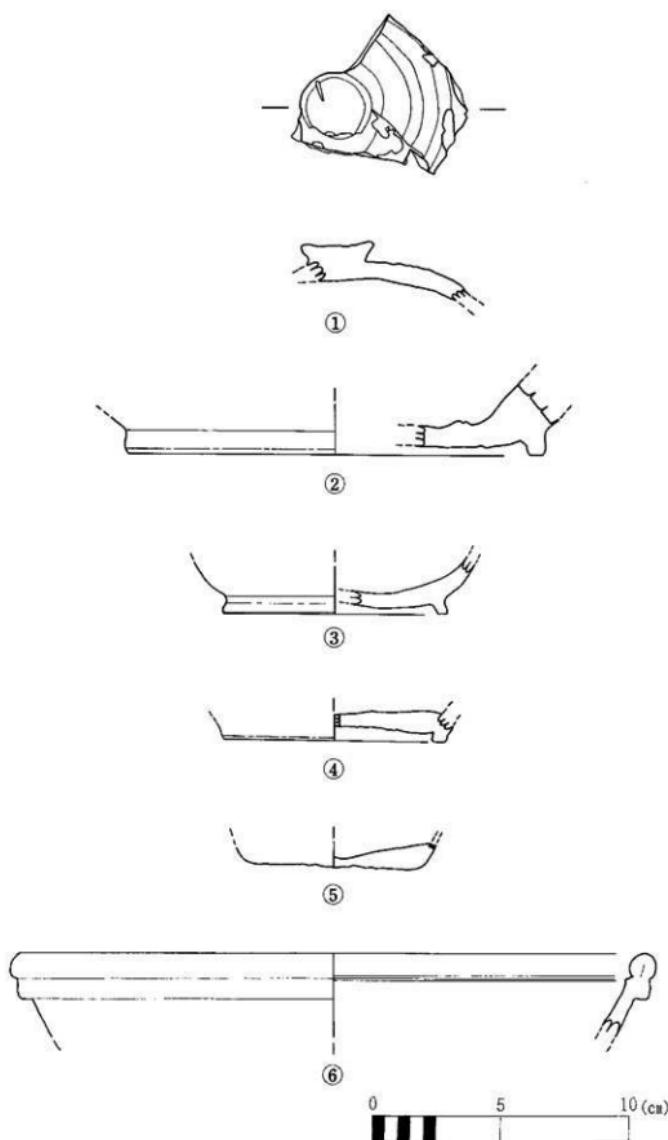


IV区⑮

天神川地区遺跡遺構写真（2）



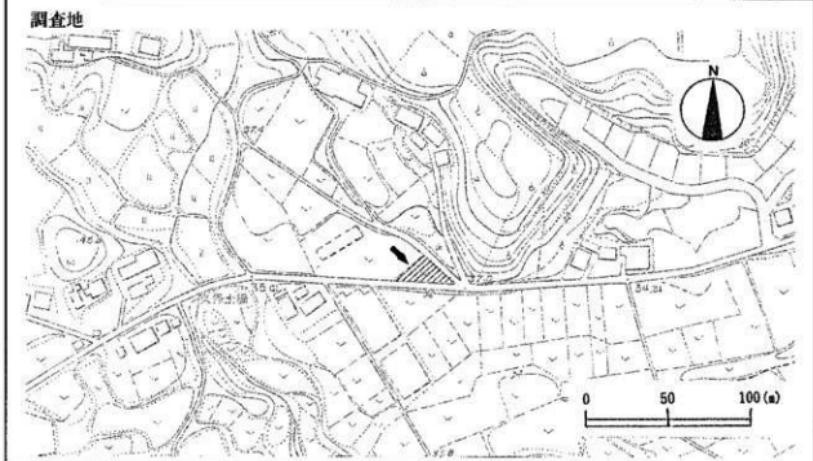
天神川地区遺跡遺物写真



天神川地区遺跡遺物実測図

さかいばたいせき
第3節 境畠遺跡

| | | | | | |
|-------|--|---------|---|-------|-------|
| 市町村名 | 佐土原町 | 調査主体 | 佐土原町教育委員会 | 調査担当者 | 木村 明史 |
| 遺跡名 | 境畠遺跡 | 所在地 | 佐土原町大字上田島 | | |
| 調査原因 | 民間宅地造成 | 調査面積 | 210m ² (トレンチ面積: 12m ²) | | |
| 調査期間 | 平成15年1月21日～ 2月3日 | 調査後の処置 | 消滅 | | |
| 遺跡の種別 | 散布地 | 遺跡の主な時代 | — | | |
| 検出遺構 | なし | | | | |
| 出土遺物 | なし | | | | |
| 特記事項 | 堆積層は、上層が北側に面する船野台地を構成するアカホヤ、クロボク火山灰の2次堆積層で、下層を沖積層の砾・砂・泥で形成されている。 | | | | |



第4図 境畠遺跡調査区図

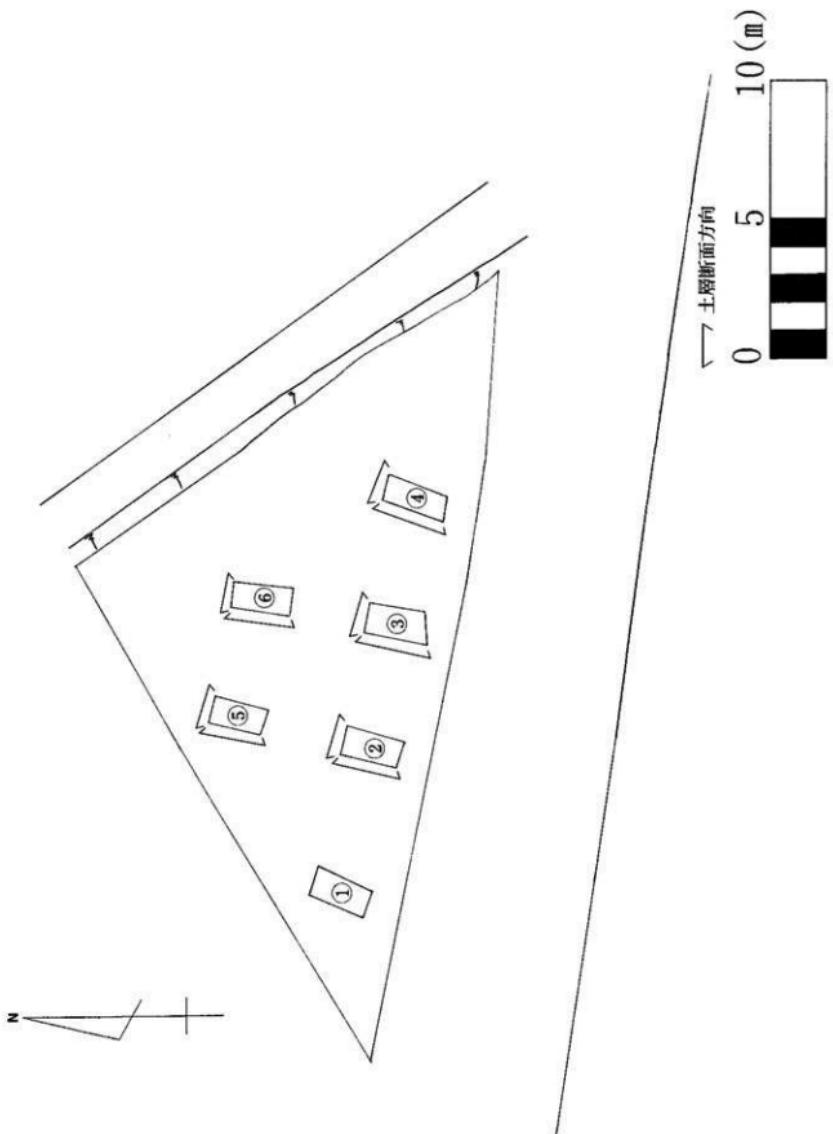


南西側から



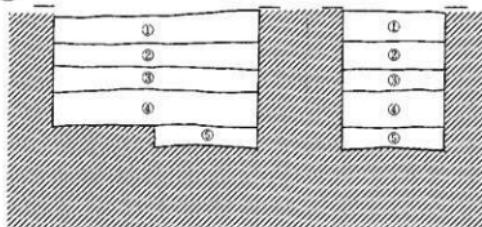
東側から

境畑遺跡調査地



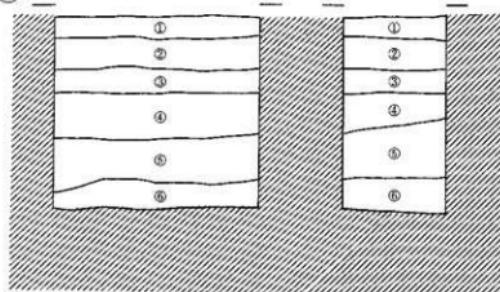
境畑遺跡調査地平面図

(1)



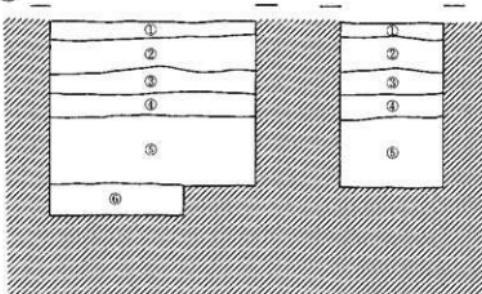
| | | | | | |
|---|------|------|---|------|----------|
| ① | 現耕上層 | 黒 | 褐 | 10YR | 2/3 |
| ② | 砂壤土層 | 明 | 黄 | 褐 | 2.5Y 7/6 |
| ③ | 砂壤土層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 4/2 |
| ④ | 砂壤土層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 5/2 |
| ⑤ | 砂壤土層 | オリーブ | 黑 | 5 Y | 3/1 |

(2)



| | | | | | |
|---|------|------|---|------|----------|
| ① | 現耕土層 | 黒 | 褐 | 10YR | 2/3 |
| ② | 砂壤土層 | 明 | 黄 | 褐 | 2.5Y 7/6 |
| ③ | 砂壤土層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 4/2 |
| ④ | 砂壤土層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 5/2 |
| ⑤ | 砂壤土層 | オリーブ | 黑 | 5 Y | 3/1 |
| ⑥ | 砂壤土層 | 明 | 黄 | 褐 | 2.5Y 6/6 |

(3)

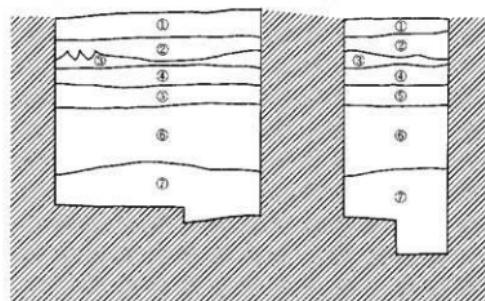


| | | | | | |
|---|------|------|---|------|----------|
| ① | 現耕土層 | 黒 | 褐 | 10YR | 2/3 |
| ② | 砂壤土層 | 明 | 黄 | 褐 | 2.5Y 7/6 |
| ③ | 砂壤土層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 4/2 |
| ④ | 砂壤土層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 5/2 |
| ⑤ | 砂壤土層 | オリーブ | 黑 | 5 Y | 3/1 |
| ⑥ | 砂壤土層 | 明 | 黄 | 褐 | 2.5Y 6/6 |



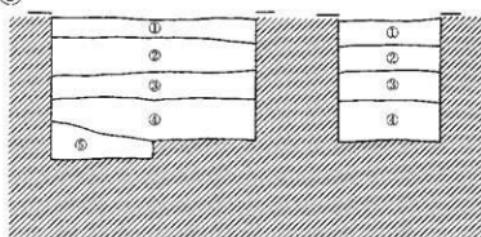
境畑遺跡土層断面図 (1)

(4)



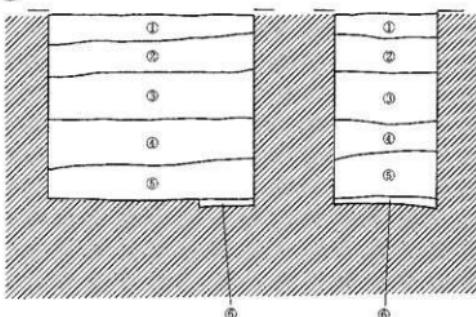
| | | | | | |
|---|------|------|---|------|----------|
| ① | 現耕土層 | 黒 | 褐 | 10YR | 2/3 |
| ② | 砂壤土層 | 明 | 黄 | 褐 | 2.5Y 7/6 |
| ③ | 砂壤上層 | オリーブ | 黑 | 5 Y | 2/2 |
| ④ | 砂壤土層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 4/2 |
| ⑤ | 砂壤土層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 5/2 |
| ⑥ | 砂壤土層 | オリーブ | 黑 | 5 Y | 3/1 |
| ⑦ | 砂壤上層 | 明 | 黄 | 褐 | 2.5Y 6/6 |

(5)



| | | | | | |
|---|------|------|---|------|----------|
| ① | 現耕土層 | 黒 | 褐 | 10YR | 2/3 |
| ② | 砂壤土層 | 灰 | | 5 Y | 6/1 |
| ③ | 砂壤上層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 4/2 |
| ④ | 砂壤土層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 5/2 |
| ⑤ | 砂壤土層 | オリーブ | 黑 | 5 Y | 3/1 |

(6)



| | | | | | |
|---|------|------|---|------|----------|
| ① | 現耕土層 | 黒 | 褐 | 10YR | 2/3 |
| ② | 砂壤土層 | 灰 | | 5 Y | 6/1 |
| ③ | 砂壤上層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 4/2 |
| ④ | 砂壤土層 | 暗 | 灰 | 黄 | 2.5Y 4/2 |
| ⑤ | 砂壤土層 | オリーブ | 黑 | 5 Y | 3/1 |
| ⑥ | 砂壤土層 | 明 | 黄 | 褐 | 2.5Y 6/6 |



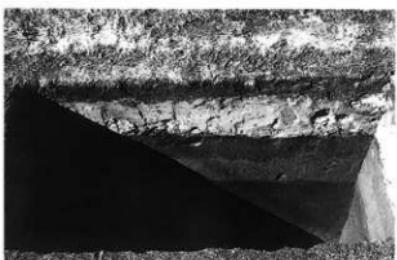
境畑遺跡土層断面図 (2)



トレンチ① (北西方向から)



トレンチ② (北西方向から)



トレンチ③ (北西方向から)



トレンチ④ (北西方向から)



トレンチ⑤ (北西方向から)



トレンチ⑥ (北西方向から)

焼畑遺跡遺構写真

第4章 おわりに

- 長蔵原遺跡は、船野台地上に位置し、平成8年度から平成9年度にかけて宮崎県埋蔵文化財センターが東九州自動車道路建設工事の事前に発掘調査を実施している。その際、遺物包含層から縄文時代早期・細石器文化期・ナイフ型石器文化期の石器・土器類が多数出土した。また、北東の谷向かいの台地には昭和45年に別府大学が発掘調査した船野遺跡が所在するなど台地上は、先史遺跡の宝庫である。しかし、調査地点は、舌上台地の根幹部に当たり生活空間としては、適さないため遺構・遺物は確認できなかった。
- 天神川地区遺跡は、佐土原丘陵の山麓部と一つ瀬川を挟んで、沖積低地上に旧河道・自然堤防・沖積段丘が形成されている。遺構・遺物が確認されているのは、自然堤防・沖積段丘上である。
- 境畠遺跡は、下村川の河岸段丘上に立地する。河岸段丘上の東側には、船野台地を構成するアカホヤ、クロボク火山灰が2次堆積層として地形の上層を覆う。下層は、砾・砂・泥で築かれている。遺構・遺物は、確認できなかった。

付 編

佐土原町天神川地区県営圃場整備事業区域周辺の地形・地質と遺跡の関係について（1）

1. はじめに

佐土原町教育委員会の依頼により、佐土原町天神川地区的県営圃場整備事業区域について微地形区分を行ったので、地形・地質に関する概要及び考察結果を報告する。なお、地形区分は主として空中写真によって行い、平成14年12月18日には現地調査を実施して、細部の確認等を行った。

2. 天神川地区の地形・地質概要

天神川地区は、一つ瀬川を中心とする沖積平野（一つ瀬川低地）の下流右岸部に位置する。沖積平野は、一つ瀬川本流を北の境界に、南は標高数十mの丘陵で境される、幅1～1.5kmの低地である。この沖積平野のうち、田佐土原の市街地から田島～天神～広瀬に至る丘陵（佐土原丘陵）の山麓部には、標高10m前後の狭長な平坦面が形成されている。この面は田島～天神付近では一つ瀬川周辺の平坦な低地と比高3～5mの急崖で接している沖積段丘（下田島面）である。段丘面は背後の丘陵地を開析する開析谷により分断される。また、延長の極めて短い丘陵開析谷の前縁など、段丘面と背後の丘陵地との間には、ときに緩傾斜の麓削面がみられる。

氾濫原低地には数条の旧河道がみられ、これらの低地帯に沿って、自然堤防が島状に発達する。自然堤防上には佐賀利や田ノ上、徳ヶ瀬などの集落が立地している。

2-1 丘 陵

- ・丘陵部の基盤は新第三系宮崎層群で構成されている。
- ・当該地域の宮崎層群は、主として暗灰色シルト岩と灰～褐灰色細粒砂岩の交互層で構成されている。
- ・丘陵頂部には、台地を形成して更新世の段丘堆積物等（通山浜層ほか）が分布することがある。当該堆積物は宮ヶ迫池付近では、 ϕ 1～10cm、最大20cm程度の砂岩等の亜円礫で構成される。（図では省略）

2-2 微高地

①冲積段丘（下田島面）

- ・冲積段丘は、 ϕ 1～3cm、最大15cm程度の亜円礫で構成され、基質はやや泥質である。構成礫種は砂岩を主とし、尾鈎山酸性岩類、緑色岩類などを含む。
- ・段丘面の表層部は褐灰色～暗灰褐色の粘性土で構成される。

②麓肩面

- ・丘陵を開析する小さな谷や急斜面と沖積段丘面との間に形成された幅20~50m程度の緩傾斜の面で、段丘面を薄く被覆（下部では同時？）する形で谷の全縁部に扇形に広がることが多い。
- ・主として数cm大の円礫が点在する円礫混じり粘性土で構成される谷底堆積物～崩積土である。

③自然堤防

- ・一つ瀬川周辺の低平地（氾濫原）の中で、旧～現河道に隣接する微高地で、低地との比高は2~3mである。

2-3 低 地

①開析谷

- ・丘陵部あるいは沖積段丘面を削剥する狭長な谷で、沖積段丘面より1~2m低い。
- ・谷底は主に泥質堆積物で、浸透水の湧出がみられる場合には、赤褐色の沈殿物が多い。

②氾濫原低地

- ・標高5m前後の低地で、地表面傾斜は全体として東及び北方面へ緩く低下する。

③氾濫原の旧河道

- ・一つ瀬川本流は、護岸堤防によりかなり直線的に流下するが、氾濫原低地には過去の曲流を示す旧河道が残存している。
- ・旧河道には、比較的明瞭な段差を示すものと、氾濫原低地との境界がやや不明瞭なものがある。また、互いに切り合い、或いは分流するものもある。
- ・切り合いの関係からみると、新城～佐賀利の旧河道が最も古く、ついで佐賀利の東の旧河道、佐賀利～田ノ上間から徳ヶ瀬にかけての旧河道の順に新しくなる。

3. 遺跡の立地と地形

丘陵部や微高地には遺跡が保存されている可能性は高いが、低地部分では元々遺跡が存在し難いか、あっても、破壊・流亡された可能性の方が高い。

3-1 丘陵・台地

- ・丘陵頂部（台地）には、旧石器～縄文時代等の古い遺跡が保存されていることが多い。
- ・当該地域では、仮に遺跡が存在したとしても、ゴルフ場建設等により既に破壊されていると考えられる。

3-2 微高地

- ・沖積段丘（下田島面）の¹⁴C年代は、5,850±90～4,570±70（九州活構造研究会：1989）とされており、段丘化するのはこれより更に後であるので、弥生以降の遺跡なら保存されている可能性が高い。
- ・宮ヶ迫池付近の段丘面では丘陵地側（南側）ほど標高が高く、水害等の面で安全性の高い地区であるので、高標高部分ほど遺構保存の可能性が高いと考えられる。（定住した確率が高く、遺跡が自然災害で破壊される確率は低い）
- ・麓層面は丘陵地からの土砂が供給される場所で、土砂災害の常襲地帯であるので生活の場としては不適当と考えられる。また仮に遺跡が存在したとしても、災害で破壊・流出しやすいので、麓層面に遺跡が保存されている可能性は低いと考えられる。
- ・自然堤防は歴史時代～現代において河川流路の移動や氾濫から免れるようになった微高地で、古くからの集落はここに立地する傾向がある。田ノ上と佐賀利の集落部の中間に位置する自然堤防では遺跡が保存されている可能性が考えられる。（表採遺物あり）

3-3 低 地

- ・低地は一般に生活の場としては余り適当な地域ではないので、元々遺跡が存在しないか、あっても破壊・流失されたと考えられる。
- ・Ⅱ河道では殆ど何も残らないが、氾濫原は現在でも重要な農耕地であり、佐賀利集落より西の地域など、その後の河川氾濫（河道移動）が少なかったとみられる部分では、田畠等の生産遺跡が保存されている可能性が考えられる。
- ・開析谷のように、近隣に生活の場があった可能性の高い地域では、遺物が存在する場合もあるが、これらは上流からの流入遺物と考えるべきであろう。

（以上）

〈参考文献〉

- 遠藤秀典・鈴木祐一郎（1986）　妻及び高鍋地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調査所、105P
- 九州活構造研究会編（1989）　九州の活構造、東京大学出版会
- 宮崎市（1998）　宮崎市地盤図（改訂版）

佐土原町下ノ山遺跡及び小牧遺跡と周辺の地形・地質（2）

1. はじめに

平成13年9月28日及び10月30日の2回にわたり、佐土原町教育委員会の依頼により、下ノ山遺跡及び小牧遺跡の現地調査を実施したので、遺跡周辺の地形・地質に関する概要及び考察結果を報告する。なお、石材等については現地での肉眼鑑定にとどまっている。

2. 下ノ山遺跡

2-1 遺跡周辺の地形・地質概要

下ノ山遺跡は、一つ瀬川海岸平野の南端部に位置し、大淀川と石崎川に挟まれた砂丘地帯の一角を占める。砂丘・砂堆は数条発達し、片瀬原の集落を載せる砂丘が最も古い。当該砂丘の表面は平坦面をなし、その平均的な標高は12m前後である。東の砂丘間低地とは比高5~6mの急崖で接している。

最も新しい砂丘は現在の海岸部で、シーガイアの諸施設が立地する標高20数mの丘陵状の砂丘である。この新旧の比較的明瞭な砂丘間約1kmの中には、100~200m幅で3条の狭長な、或いは島状の砂堆がみられる。

遺跡が立地するのはこれらの砂丘間の低地で、標高5m前後の低湿地帯である。当該地域の地表面傾斜は全体として東及び北方向へ緩く低下するが、遺跡北側には有料道路があるため見通しが悪く、見掛け上は南東方向に低下するよう見える。遺跡部分の発掘前の地表面は周辺よりやや低く、西側には北方へ流下する用水路が設置されている。

2-2 遺跡部分の地質

下ノ山遺跡の地質をトレンチ壁面等で観察すると、表層と下部層に大きく2分される。表層は褐色~暗褐色~黒色の粘性土で構成され、上半部は褐色粘性土、下半部は黒色粘性土である。下部層は灰~明灰色の砂質土で構成され、上位の黒色粘性土との間は境界が波打っている。南東隅付近では、この境界が幅4m高さ30cmほどのカマボコ型に盛り上がり、N20°E方向へ延長するようにみえる。当該部分では灰色砂質土中に黒色粘性土がラミナ状に取り込まれている。この3~4m西側では、逆に黒色粘性土中に灰色の砂質土がうねったレンズ状にみられる。灰色砂質土中からは、各所で地下水の湧出がみられる。湧出部では赤褐色の沈殿物が多くみられる。

水田整備とされる範囲のうち、D-5グリッドの地表面では暗褐色粘性土中に幅5cm前後の円~梢円形をなす白色砂質部がみられる。個々のつながりは不明であるが、全体としてはEW方向に連続している。

表土剥ぎ後の地表面には、時に数cm大の円窪が点在する。これらは細流砂岩が普通であるが、軽石（C-3グリッド）や石灰岩（D-6グリッド）とみられる岩質のものもある。

2-3 地形地質の考察

下ノ山遺跡とその周辺部について、既存のボーリング資料をみると、基盤（宮崎層群）の深度は北部地域では概ね浅いが、南側では急激に深くなることが分かる。当該資料を使用して地域一帯の基盤岩の等深度線を描いてみると、Ⅲ地形（最大海退時：2.3万年以前）の谷間は尾原から西下山を経て、この南で広原方面からフェニックス動物圏方面へとのびる古石崎川に合流すると推定される。基盤深度の深い地域は、遺跡北部地域のほか、佐古北部の楠ヶ別府や南部の住吉団地（宮崎市）付近などにも広がっており、これらはある時期（恐らく縄文海進時）の海食台と考えられる。

すなわち、現在の地形はⅢ地形とは全く異なっており、縄文海進後、内湾性の粘土層を覆う細粒砂層が堆積する段階（5千年以降の海退期）で、この海食台を始めとする基盤の高まりにひっかかるようにして、佐土原丘陵の前縁部に砂堆・砂丘（Ⅲ期砂丘）が形成されたものと考えられる。またそのことにより海城への出口を狭められあるいは閉じられた旧石崎川等の中小河川の周辺部では、後背湿地が形成されるに至ったと考えられる。那珂低地を始め総合農業試験場付近の谷間なども半ば出口を閉ざされた形の後背湿地となり、改修前のⅢ石崎川は、この低地内を自由蛇行していたと考えられる。

砂丘は海退の進行とともに、さらに前面に新砂丘列を形成し、後背地には一ツ葉海岸にみられるような狭長な湾入部が形成され、やがてこれがアシの茂るような低湿地～原野へと変化した。さらに海退が進行すると、低地帯は完全に内陸の低地となり、過剰塩類の流亡等により、耕作も可能になったと考えられる。

当該遺跡では地下水位が極めて高い。発掘時点では水中ポンプにより強制排水されていたため、地表より1m付近に地下水位があったが、水没跡等をみると、本来は地下数10cmに水位があると考えられる。この地下水位の高さが、この地での水田開発を可能にしたものと考えられる。なお、D-5グリッドの砂脈状部や南東隅付近の下部層の盛り上がりなどの成因は良く分からぬ。後者は、海退期における砂浜海岸の小規模な沿岸洲のような高まりが、その後低湿地の堆積物に覆われたものである可能性が考えられる。また前者は、低湿地の時代に地震等による間隙水圧の上昇により、下部砂質層からの砂が表層の割れ目等を充填するように上昇した跡である可能性などが考えられる。

3. 小牧遺跡

3-1 遺跡周辺の地形・地質概要

小牧遺跡は、石崎川の下流左岸部、小牧台の丘陵部南東端に位置する。六野原（国富町域）に端を発する石崎川は、東上那阿（岩見堂）付近で東から南へと向きを変えながら那珂低地を流下した後、宮崎市島之内付近で北東へと流れを転じて、全体として佐土原丘陵を取り巻くように流下し、日向灘に至っている。

石崎川は近年の河川改修工事等により、かなりの部分で直線化されているが、一部には改修前の曲流岸（Ⅱ河道）が残存している。宮崎県埋蔵文化財センターのある一帯は、「団」の名のとおり、旧河道に開まれた天然の曲輪であるといえる。また、当該遺跡部分は、このⅡ河道の氾濫原で、蛇行の頸状部に相当する。

遺跡北西部の小牧台や東の和田山などの丘陵部は、基盤の宮崎層群で構成されている。上流側の総合農業試験場の西側では、丘陵地頂部などに姶良火碎石堆積物（いわゆるシラス）や段丘堆積物が台地を形成して分布することがある。段丘堆積物は10cm以下程度の疊層で、砂岩を主体とし尾鈴山酸性岩類やチャート礫等を混じえる。

3-2 遺跡部分の地質

小牧遺跡は町道の拡幅に伴う発掘で、現道の南側を取り巻く形に、南北2ヶ所に区画されている。北側の区画では北端に板碑がある。道路下は急斜面で、遺跡部分はその下の低地部分である。道路下の壁面のうち道路のカーブ付近に、一部基盤の宮崎層群が顕出ししている。ここでの宮崎層群は暗灰色シルト岩で、この上部は約50cm厚の茶灰色粘土である。この部分の北部延長では、底部には高師小僧混じりとみられる茶灰色粘土が分布する。この上位は20cm厚の円礫混じり粘性土層で、φ1~10cm、最大20cmの亜円礫で構成される。主な礫種は砂岩のほか尾鈴山酸性岩類やチャートもみられる。さらに上位は暗灰色粘土、灰褐色砂質粘土と重なり、最上部は小円礫や陶器片を混じえる暗灰色粘性土（表土）で、これらの層厚は約40cmである。

南側の区画の端には井戸がある。井戸枠には阿蘇の溶結凝灰岩が使用されている。一般に溶結凝灰岩（灰石）はブロック状に方形加工されて使用される例が多いが、当該井戸では厚板状の灰石が円形にくりぬかれており、民俗文化面での資料価値があると思われる。

遺跡内では溝状遺構？様の船底形の断面を有する狹長な凹地内に多数の円礫が散在する。溝部の埋土は茶褐色（高師小僧）混じりの褐色粘性土である。円礫はφ数cm~數十cmで、砂岩のほか尾鈴山酸性岩類、チャート、緑色岩類などがみられる。全体に表層の粘性土中には、多数の高師小僧がみられる。

3-3 地形地質の考察

小牧遺跡は基盤の宮崎層群が川海に突出していた地域に相当する。和田山団地の東には、その名残りの丘陵（当時の島？）が残っている。

佐上原丘陵の前線部に形成された砂丘（川期砂丘）により、行く手を阻まれた旧石崎川は、砂丘の後背地を泥質堆積物で埋め立てつつ、出口を求めて砂丘の背後を北流した後、広瀬小学校の基盤の高まりにぶつかり、東流することになる。このようにして旧石崎川はこの地に定着することになるが、当該部分での旧石崎川の曲流はかなり大きく、氾濫原に当たる小牧遺跡部分は蛇行の頸状部となり、出水時には度々洪水にみまわれたと考えられる。

上流地域の堤下の台地や平原池付近の丘陵縁辺部は、宮崎層群を基盤に、姶良火碎流堆積物（いわゆるシラス）で構成されたシラス台地である。また、総合農業試験場西の丘陵頂部には礫層がみられる。石崎川上流地域のこれらの台地から供給された円礫転石等は、洪水とともに下流域にもたらされ、暗灰色~褐色の礫混じり火山灰質粘性土として、氾濫原である当該遺跡部分に再度堆積したと考えられる。

従って、当該遺跡の「溝状遺構？」は、人丁的なものというより、自然の堆積物である可能性が高い。また、生活・生産の場としては余り適当な地域と思えないでの、遺物が存在するとしても、上流からの流入遺物の可能性も検討すべきであろう。

4. あとがき

遺跡一帯の地形・地質の形成史は「古地理変遷図」に示すとおりで、現況は縄文海進以降現在までの海退期における堆積と削剥の歴史の結果である。縄文海進期に内陸深く進入した海は、水没した丘陵地の頂部を波食して海食台を形成するとともに、台地～丘陵間の低地に深い入り江を形成した。海退の段階に入ると、佐土原丘陵前線の基盤の高まり等を中心に、沿岸流による砂州を発達させ、これらはやがて大きな砂丘（旧期砂丘）へと発展していく。それと同時に砂丘の背後（現那珂低方面）は閉塞海域からやがて埋積されて低湿地となって行く。旧期砂丘の前浜部も、さらなる海退により前面に新たな砂丘（新期砂丘）を形成し、その背後に狭長に形成された鴻入部もやがて離水して低湿地の原野となって行ったと推察される。これらの地域は、過剰塩類の流亡等により完全に内陸の低地となった段階（弥生期？）で、田畠等の生産の場として生活の表舞台に登場することになったのであろう。

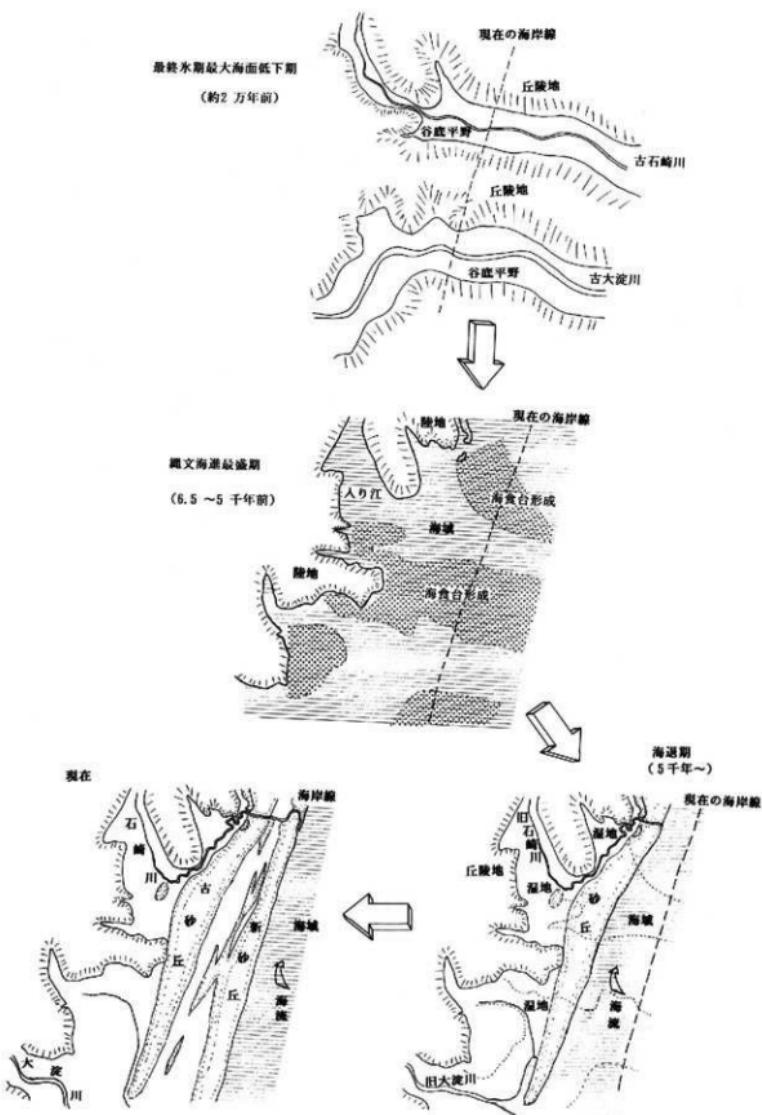
以上が地形・地質から予想される遺跡周辺地域の形成史である。地下水位の高い低湿地である下ノ山遺跡一帯が水田として利用されたのは当然であるといえる。一方、石崎川の蛇行帶内の氾濫原に位置する小牧遺跡では、元々遺跡が存在し難いか、あっても破壊・流失される可能性の方が高いと考えられる。

（以上）

〈参考文献〉

- 遠藤 尚（1963） 宮崎県中部の段丘を覆う火山灰層の層序学的研究。宮崎大学学芸部紀要、No.15-16 P29-52
- 遠藤秀典・鈴木祐一郎（1986） 妻及び高鍋地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調査所、105P
- 木野義人・影山邦夫・奥村公男・遠藤秀典・福田 理・横山勝三（1984） 宮崎地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調査所、100P
- 木村克己・巣谷敏光・三村弘二・佐藤喜男・佐藤岱生・鈴木祐一郎・坂巻幸雄（1991） 尾鈴山地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調査所、137P
- 宮崎県（1981） 20万分の1宮崎県地質図及び同説明書（宮崎県の地質と地下資源）、72P+29P
- 宮崎市（1998） 宮崎市地盤図（改訂版）

古 地 理 变 遷 図



古 地 理 变 遷 図



- ~~~~~ -10 基盤岩等深線
(TP表示)
- ~~~~~ 河川(現況)
- ~~~~~ 丘陵地・台地
- ~~~~~ 市町村界

基盤岩等深度線図



報告書抄録

| ふりがな | さどわらちょうないいせき6 | | | | |
|------------------------|---|--------------|------------------------|-------------------|-----------------------|
| 書名 | 佐土原町内遺跡Ⅵ | | | | |
| シリーズ名 | 佐土原町文化財調査報告書 | | | | |
| シリーズ番号 | 第24集 | | | | |
| 編著者名 | 佐土原町教育委員会 | | | | |
| 所在地 | 〒880-0297 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下田島20660番地 | | | | |
| 発行年月日 | 2003年(平成15年)3月31日 | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | 遺跡番号 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| ながそのはるいせき 長蘭原遺跡 | さどわらちょうおおあざ 佐土原町大字 にしかみなか 西上那珂 あざながそのばる 字長蘭原 | 5005 | 平成13年11月6日～ 11月10日 | 64m ² | 無線基地局 設置 |
| てんじんがわちくいせき 天神川地区遺跡 | さどわらちょうおおあざ 佐土原町大字 かみたじま 上田島 | 1017 1009 | 平成14年10月16日～ 12月24日 | 108ha | 県営粗い手 育成基盤 整備事業 |
| さかいばたいせき 境畑遺跡 | さどわらちょうおおあざ 佐土原町大字 にしかみなか 西上那珂 | 5010 | 平成15年1月21日～ 2月3日 | 210m ² | 民間宅地造成 |

宮崎県佐土原町文化財調査報告書第24集

佐土原町内遺跡VI

2003年3月31日

編集・発行 宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会
〒880-0297 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下田島20660番地
TEL 0985-73-1111

印 刷 光洋印刷株式会社
〒880-0211 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下田島10131番地
TEL 0985-73-3594